

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。

つ の ぶ え

社会福祉法人 **小羊学園**

〒431-1304

静岡県浜松市北区細江町中川7440-1

電話：053-437-0826 FAX：053-437-0849

E-mail kohituji@imix.or.jp

H.P http://www.imix.or.jp/kohituji/

発行人：稲松 義人

印刷所：聖隷サービス(有)

定 価：一部 30 円

2007年4月20日

第 291 号

エンパワメント

理事長 稲松 義人

社会福祉に限ったことではないかも知れないが、最近では意味を理解するのに知識が必要なカタカナ語が多い。表題の「エンパワメント」も社会福祉の中では大切な概念としてよく聞くようになった言葉であるが、初めての人のとってはいったい何のことだろうと思われる言葉である。単純に「力をつける」というと「外部から何か新しい力が与えられる」とも捉えられるが、そうではなく、むしろそれとは対立的な概念として「内在している可能性を引き出されること」と説明するべきなのだろうと知っている。

この言葉の示す意味から考えると、支援の対象となる方たちが自立する力を身につけることを目標に援助しようとするときに、ともすると訓練、教育などのプログラムを援助者側の主導で進めがちであったことへの反省が感じられる。それは、私たちが日々の利用者への支援においても、いつでも起こりがちなことのように思う。

小羊学園の近くに「わかば保育園」という保育園がある。私的なことで恐縮だが、我が家の四人の子どもたちも幼児期にお世話になった保育園である。

この保育園の保育理念は、実に簡明瞭に「エンパワメント」を示していると感じていた。それは「子ども自身に生きさせよ」というものである。子育てをするときに、親や保育者、周囲の大人たちの思いによって進めようといううことは、ある意味当然のことのように思われる。少年犯罪の低年齢化や公共心の育たない実態を憂えるとき、子どもたちを大人の責任でしっかりと導くことは大人の責務であると主張される。それこそが子どもたちに対する大人としての愛情の表現であると思込んでいるかも知れない。確かに、子どもたちを大切に思う気持ちから発想されているのだろうし、愛情をもって子どもたちに接することは間違いない。私も大切なことだと思ふ。

しかし、子どもたちのために、大人が道を整えてやり、その上を安心して歩いてもらうということ、子どもたちが本当に育つのだろうか。本来は、子どもが育つことの主体は子どもにあるのではないだろうか。子ども自身が生きていく力を養い、でこぼこの道でも、時には道なき道をも進んでいける力が養われるように育てることが大切だということではないだろうか。わかば保育園の保育理念は、そのことを問いかけてくれる。

しかし、これは保育の世界に限ったことではなさそうである。「お年寄り自身に精一杯生きていただく。」「障

がいのある人自身が喜んで生きていくようにしよう。」このように言い換えてみると、他者に接して支援しようとする営みの中では、いずれにも場合にも通用することであるように思う。

さて、自分自身についてはどうだろうか。自分自身で喜んで日々を過ごせているだろうか。自分の思いで人生を歩んできたと思ひ込んでいたのに、ちょっとした課題に直面するだけで、周囲の価値観や一般的な常識に縛られて自分自身では、答えを出せないでおろおろしていることが結構ある。すべてのことを先輩のやってきたとおりに、予め示された道を歩いていけばよいというわけにはいかない。

聖書の中に、キリストが、障がいのある人と出会い、その願いを受けてその障がいを取り除いてやるという奇跡物語がある。しかし、そのような場面で最後にキリストは「あなたの信仰があなたを救った。安心していきなさい。」と語りかける。これは、あなた自身の中に、障がいを超えて生きる力が内在していたのですよ。あなた自身の中に課題と向き合う力が隠されていたのですよ。」と諭しているように思えるのである。何年か前に、ある女性の牧師先生が「このキリストの言葉から、キリストによる救いがエンパワメントの視点に立ってなされていることが示されている」とお話されたことを、ときどき思い出している。

前回のつのでの報告を受けて、何人もの方から、山浦明子先生を偲んで、長文のお手紙をいただきました。一つひとつご紹介してもよいかとも思いましたが、たぶん公表することは、明子先生ご自身がお望みではないだろうと察し、私どもの心に深く受けとめさせていただくことにしました。

遠州教会の小林牧師と、もっとも深く関わりをもってくれた渡辺禎子さんに文章をお寄せいただきました。

山浦明子氏を偲んで

小林 眞

明子氏は、牧師の家庭に生まれ、一三歳で洗礼を受けてクリスチャンとしての歩みを始められたが、ご本人が私に話されたこと。

ある時「私はソロクリです」とおっしゃったが、その意味が分からず「どういうことですか？」と聞くと、牧師の父親に「ソロソロ洗礼を受けませんか？」と勧められ、大きな抵抗もありません。そのまま受けられたとのこと。

父親の「ソロソロ洗礼を」との言葉から、「ソロソロクリスチャン、即ち、ソロクリ」とおっしゃったのだが、ま

だ続きがある。

さらに成長された後、自らの意志で聖書を読み、探求し、自覚的にクリスチャンの道を選んだ時、母親に「なぜ自分で探求し、結論を出すまで洗礼の時期を待ってくれなかったのか？」と聞くと、母親は「神さまの導きと、親の願いがあって何が不満か？」と答えられ、これには、あの聡明な明子氏も「何も返せなかった」と話された。

遠州教会でのお働きは、私が赴任した時はもう六〇代後半。現役パリパリを少し終えた頃で、俊治氏と共に、忠実に礼拝を守っておられ、婦人会などでも多くは発言をされなかった。次の世代にバトンを渡すことを考えておられたようで、私の目で見た活躍の様子を紹介できないことは少々残念である。

一五年くらい前、明子氏に動脈瘤が発見された。患部は心臓のすぐ近くとかで、手術は可能だが、術後は過去の例からほとんど寝たきり状態になる。一方、このままだと今の生活は何とか確保できるが、もし破裂すれば即死は免れないという。ご夫妻で考えられた結果、手術しない道を選択された。

この時、俊治氏が「何かしたいことはありますか？」と問うと、明子氏は「祈禱会に出席したい」とおっしゃり、あの当時、俊治氏は多忙な中を、水曜日には、車で明子氏を送って来られ、

共に祈禱会を守ってくださった。

八〇歳を過ぎた頃、少し弱ってこれられ、礼拝に出席することが少し困難になった時、私をはじめ、訪問された方に「礼拝に出たい」と繰り返しおっしゃっておられた。

このことを思うと、俊治氏の姿勢が重なってくる。俊治氏は「千葉から岡山間での日曜午前中の講演や結婚式などでは、夕礼拝までには十分帰って来れる」と言い、実際にそうされておられ、本当に頭が下がった。

二人して持つておられた礼拝と祈禱会への熱い思い、忠実なクリスチャンとしての信仰と献身の生涯そのものであった。

以下のことは、私だけが知っていることであるが、この機会にお伝えしておきたい。

誰もが言葉を失った俊治氏の急逝。しばらくして同氏の遺骨を、中澤墓園にある遠州教会納骨堂に納めた翌年、召天者記念礼拝の後、明子氏が納骨堂に入られ、梯子のような少々危険な階段を下りて、俊治氏の遺骨が納められた所でおっしゃったこと。

たまたま俊治氏のボックスは、明子氏の目よりも高いところにあり、明子氏は背伸びをして小さな扉を開け、遺骨の箱を見て嬉しそうに「あなた、来ましたよ！」と。

この呼びかけを耳にした時、前年の

ホスピス入院当日、俊治氏が私に白状されたことを思い出した。

検査結果は、考えられる限りの最悪。一晩だけ自宅に戻られた時、俊治氏は、二人で抱き合って泣いたこと、さらに「小林先生、おじいさんとおばあさんが抱き合って泣くのもいいものですよ」と、最後の「のろけ話」を涙と共におっしゃった…。

三月一〇日の葬儀後、明子氏の遺骨も先の俊治氏と同じボックスに納められた。

(遠州教会牧師)



明子先生の想い出

渡辺 禎子

「今日も人間になりました。有難うお訪ねしての帰り際、明子先生がいつも言われておられた言葉です。

「人は人とお話をしないと(関わりを持たないと)人間にはなれないの」と、それは、ゆっくりと椅子に掛け、



十字の園の明子先生をお訪ねして

きちんと向き合ってお喋りのことであって、明子先生の中では、「スタッフの皆さんは、とても良くして下さるのよ」と感謝しながらも、支援を受ける中でやり取りは別のもののようにした。

小羊学園からご自宅に向かう十字の園の坂道は、明子先生にはかなりきついものだったと思います。俊治先生がいらした頃は、ご病気を幾つかかかえていらした明子先生を気遣い、いつも車で送迎されていらっしゃいました。俊治先生がお亡くなりになられてからは、私たちがいくら「お送りします」と声をお掛けしても「自立しなければ」と、途中で休みながらもご自分の力で通われ、決して甘える事はありませんでした。

そんな明子先生ですから、健康上からとは言え、我が家を目の前にして施

設での生活を余儀なくされ、お世話にならなければいけない事はどんなにか悔しくお辛かった事と思います。

もう一つ、とても淋しがっていらした事は毎週欠かさずに通われていらした教会に行かなくなりました。「悔しい、仕方が無い」と良く言われておりました。

そんなお気持ちを癒してくださいしたのは、十字の園の方々の心配りはもとより、教会の皆様のご訪問、遠方いらっしゃる学友、教え子の皆様からのお便りや贈り物、関係者の皆さんのお見舞いの数々でした。

「忘れられていない、覚えていてくださる、何より嬉しいことです。」とその度に言っておられました。嬉しそうなお顔が今も蘇って来ます。

明子先生はいつも「有難う」と言ってお下さいましたが、語らいの中で、私の方こそ沢山の気付きや学びをさせて頂いたと思います。あたたかな心にさせていただきました。

私も、この春四〇年間余りお世話になりました小羊学園を退職しました。これからは、外から、育てていただいた大好きな小羊学園を応援したいと思います。

明子先生が大好きでしたリハビリの時間に作られた一輪挿しを頂いて食卓に置きました。今は、クリスマススローズと共に私の心を満たしてくれています。

(前青年寮施設長)

渡辺禎子先生への感謝

稲松 義人

小羊学園では、最近は職員のことを「〇〇先生」と呼ぶのはやめようという事になっていきます。昔は、入所している人たち全員が子どもで、小羊学園は学校に行けない子どもたちの学校代わりという性格もありましたので、直接支援をする職員のことを「〇〇先生」と呼び合っていました。最初は、禎子先生も「渡辺先生」と呼ばれていたようですが、その後たまたま同姓で男性の「渡辺先生」が就職されたため、それから「禎子先生」と呼ばれるようになったようです。同姓の職員がいると、今も「悦子さん」「美沙枝さん」など、名前で呼ばれる職員は何人かいるのですが、どうも大先輩を「禎子さん」とは「呼ぶのは気が引けるのか、渡辺姓が一人になったあとも、ずっと、若い人たちから「禎子先生」と呼ばれ慕われてきました。

禎子先生は、小羊学園開園時から職員のお一人で、途中少し小羊学園を離れますが、再び職員になってからこの三月末に退職されるまで、小羊学園の歴史とともに歩んで来られたのでした。小羊学園の歴史は、いつの時代も決して安定した時期はなく、思いつく出される皆さんの想い出とともに、禎子先生もその時々の

苦勞を担ってこられたことを思い巡らしています。

「いざ」ときの禎子先生」といつかは失礼かも知れませんが、寮で一緒に働いていたときも、職員の欠勤、欠員が生じたときには、どんな役割もピンチヒッターで担われました。

一寮でも二寮でも（児童寮・青年寮になる前は、二つの寮をそう呼んでいた）、調理室でも、ハウスキーピングでも、事務所の仕事でも、常勤の看護師が得られない時期には、看護師の補佐業務もしておられたことを思い出します。

そんな禎子先生ですから、現場を離れて青年寮の施設長となったあとも、現場の人たちの相談に乗るだけではなく、いざというときには現場に入り、利用者と直接向き合っていて、若い人たちに、小羊学園の精神を体現してくださったのだと思います。私が理事長兼務だったこともあり、児童寮も含めて、日常的なことでは、小羊学園全体の園長役をこなしてくださいました。

ご自身はクリスマスチャンではありませんでしたが、身についた気配りと献身的な姿勢で、利用者のご家族や、教会の人たちも含め外からの支援者に対して、小羊学園の顔として信頼されておられました。それだけに寂しく感じる人たちが多いのも当然です。

長い間ありがとうございました。

インド・聖隷希望の家に 車を贈りました

インドで、聖隷希望の家という施設をしてられるアブラハムさんのことは、これまで何回かつのぶえで紹介してきました。一九八四年に小羊学園などで実習された後、インドの南部、ケララ州のプナール近郊で障害のある人たちの施設を運営しております。

最近、聖隷クリストファー大学で国際社会福祉実習などを通じて交流がありますが、昨年現地を訪問された聖隷学園の方たちが、施設で使っている車が老朽化し大変ご苦労されているということを知り、帰国後みんなで募金をしよと呼びかけてくれました。そ



れを受けて、聖隷学園、聖隷福祉事業団、神戸聖隷福祉事業団、牧ノ原やまばと学園、十字の園などと一緒に、小羊学園でも協力をすることにして、小羊学園（児童寮・青年寮）と小羊デイケアホームで、昨年のクリスマス会での献金をそのために集めました。

全体で目標額四〇〇万円に対し、小羊学園からの約二四万円を含め、四六七万円が集まりました。寄贈された車両は、スズキがインド向けに作っている七人乗四輪駆動車「グラランドビターラ」で、残った費用もメンテナンス等の費用に寄付されました。

先日、現地で贈呈式があり、その後アブラハムさんから小羊学園へもお礼の手紙をいただきました。

つばさ静岡・看護師募集

毎回募集していると何とかなっているとされるかも知れませんが、本当に困っています。今は小羊学園（児童寮・青年寮）の正規看護師も出向してもらい、小羊学園は非常勤の看護師さん二名体制で踏ん張っています。どうぞお心当たりの方がいらっしゃいましたらご紹介ください。お願いします。

連絡先 つばさ静岡

（静岡市葵区城北一一七）
電話（〇五四）二四九一二八三〇

担当：羽山（事務長）

支える会だより

4月21日（土）遠州教会を会場に 稲松理事長による講演会開催

いよいよ実現へ向けて動きださないといけないう時期になったこともあって、移転改築によって小羊学園が何を目標そうとしているのかということについて、稲松理事長から「小羊学園がめざすもの」を題して1時間半の話がありました。支える会の講演会として初めての試みでしたが、遠州教会関係者を含め、約30名の方がお集まりくださいました。これからは機会があれば、多くの人たちに小羊学園がめざしていることをお聞きいただきたいと思っています。

2006年度小羊学園を支える会寄付金報告

3月分	33件	519,680円
(累計)	817件	14,514,094円

皆様のご支援に心より御礼申し上げます。

小羊学園改築計画にご協力ください

（口座名義）「小羊学園を支える会」
郵便振替口座 00890-4-45415
りそな銀行浜松支店（普通）040005
静岡銀行細江支店（普通）043483

問い合わせ先：小羊学園
〒431-1304 浜松市北区細江町中川 7440-1
電話 053-437-0826

編集後記

四月から、山浦記念館（昔の学習棟）にある地域療育支援センターと同室だった執務室から、小羊学園事務室の隣の小さな園長室（禎子先生のデスクのあったところ）に引っ越してきました。児童寮、青年寮など、現場の職員たちがたびたび相談や報告に来ますし、小羊学園に出入りしてくださる様々な人たちの声も、よく聞こえるようになりました。次から次に入る情報を整理しきれず、対応しきれずに、日数だけが過ぎていきます。つぶえの発行も、四月の初旬には原稿をいただきましたが、編集がすっかり遅れてしまいました。

頭と体がいくつあっても足りない自分自身の力のなさを思い知らされています。現場の職員たちも精一杯頑張っていると思うのですが、なかなか思うようにものごとが解決しないのも福祉の仕事の特徴かもしれません。それでも、投げ出すことができずおろおろしています。ひょっとするとこれが小羊学園らしい現場なのかも知れませんが、現場からの問いかけに的確に対応することについては不慣れもあり、あちこちから来る問い合わせやご支援に対する失礼があるのだと思います。どうぞお許しください。皆様のご健康をお祈りいたします。

（稲松）